

『ひとり言』から「俳諧小言」へ

黄色 瑞華

—

上島鬼貫『ひとり言』（表紙・独こと、序・独言、下巻表紙・日とり言、跋・独言集）は享保戊戌（一七一八）跋（初刷本・大本二冊・新井弥兵衛板、後刷本・半紙本二冊・中西卯兵衛板）。

『ひとり言』が鬼貫が志向した「まこと」の俳諧の根幹を示したものであることは周知の通りであり、このことについて詳述の必要はないのだが、その奥書には次のごとくある。

右二帖者、年比思ひ寄たる事とも、寢覚注1に、かいつけ置侍りしを、あながちに乞にて、千及市貢にあたふる者也。

その所説は

それがし八歳に成ける頃いなければなる発句しそめてより、十三歳の頃松江維舟に師のちなみをむすびてかの翁の古風をまなび、此道に心をいれて不断独吟の百韻をつゞり、その頃名に立る古老のかたゞへ送りて、點をこのみやる事いく巻といふ其数をしらず。かくて十六歳の頃より梅翁老人の風流花やかに心うつりて、又其当風をいひ習ひ、猶其のりをもこえ侍りて、文字あま

り、文字たらず、或は寓言、或は異形さまいひちらせし頃、発句・付句によらず、人によしといはれ、我心にもおもしろかりしやうに有けるをも、修行しつる覚もなくてなす所、よき句にて有べきやうはあらじと、ひたすら我心にうたがひを起して、更にこゝろをとどむる事なく、思ふにいにしへよりの俳諧はみな詞たくみにし、一句のすがたおほくはせちにして、或は色・品をかざるのみにて心浅し。——中略——たゞ俳諧は狂句作意をいふとの心得たるばかり、一槩にかたよるべき道にもあらず。猶深き奥もやあらんと、延宝九年の頃より骨髓にとほりて、物みな心にそむくことなく、やゝ五とせを経て、貞享二年の春、まことの外に俳諧なしと、おもひもうけしより、そのかざりたる色・品も、かの一句のたくみもことごとくうけて、それ注2は皆そらごとくなりぬ。

とあるごとく、八歳のころから発句をはじめ、十三歳で松江維舟に師事、さらに西山宗因の作風にひかれて「詞たくみに」することのみを求めたが、それが「色・品をかざるのみにして心浅」きことに気づき、「猶深き奥もやあらん」と模索するうちに、「貞享二年の春、まことの外に俳諧なしと」思い当たったというのである。

すでに先学の説かれるごとく、この道程に歌学の影響すこぶる大きく、長伯の序にも「其源は難波津浅香山の、山の井よりながれて、人

倫を和し、人の心をなぐさむるは、またく和歌の徳にかはらずや。和歌にも俳諧体とてあなれば、その中よりわかれ出たるにやあるらん。しかあれば、遠くも近くも、俳諧に名ある人の名句とて聞ゆるは、其心幽玄にして、其姿又妖艶なる物をや。」とある。

心主詞従、まこと即幽玄の俳論は遠く『新撰髓脳』以下の歌論に学ぶところが多く、又、芭蕉の「幽玄」にも比較される。

二

夏目成美「俳諧小言」は、成美の俳諧文集『四山藁』（豊島久蔵編、文政四年（一八二二）慶元堂刊、大本二冊）所収。内容は、望筑波山辞・『代枕集』序・鶴鶴帖・『乞食俗集』跋・『非仙集』序など三十六編（『四山藁』第一所収）と俳諧小言・『青羅句集』跋（正しくは序）・『句帳』小序・『曙句合』序・『野狐録』など三十四編（以上『四山藁』第二所収）の七十編から成り、このうち、成美の俳諧文学観が最も顕著に現われているのは「俳諧小言」である。

「俳諧小言」はその題辞の下に「十則」とあるが、箇条書きではなく一続きになっている。その概要は、それぞれの段落の冒頭文によってつかむことが出来る。いま、それを掲げておく。^{注3}

① 俳諧は、みるもの聞くものにつけて思ひを述る戯なり。

② 句を作るに至りて、しひて雅を求むべからず。句を見るに心あり。

③ 文章は実を尊む。

④ 手平乎波はすべて自得すべし。

⑤ 附句は、前よりの寄やう、句毎の転変、かねてかくとは定めがたけれど、一つの理をだに去捨侍らば無礙自在なるべし。

⑥ 去嫌は変化の大体を知るべし。

⑦ 会席のありさまいかにも風流なるべし。

⑧ 世人の褒貶さらにたのむべからず。

⑨ 世上に俳諧を唱ふる者、しりがほにしておほむね俳諧の趣をしらず。

三

『四山藁』、特に「俳諧小言」に見られる成美の俳諧文学観を、芭蕉に深く傾倒した成美の蕉風俳諧の理解・志向と見るのが通説であり、^{注4}「ただ蕉翁一世の作意を鑑として、おのれくが醜を正し侍らば、おのづから向上の一路にも企至るべき歟」（「俳諧小言」）としたことも事実であるが、『四山藁』の俳論をつぶさに検討していくと、その蕉風理解・志向とともに鬼貫の「まこと」の俳諧理解・志向のあったことも看過しがたいのである。

「俳諧小言」の第一則は、

俳諧は、みるものきくものにつけて思ひを述る戯なり。それが中に、中昔まではたゞ狂言にのみいひ来れるを、ちかき昔、ばせを翁より、はじめて詩歌の情をうつし、風雅の心を俗体に云る事になりたり。たとほゞ、『詩経』『万葉』等の古体に似たるべし。

で、はじまる。成美はここで、俳諧の文学は「思ひを述る戯なり」と定義し、中昔、つまり談林の俳諧では「狂言にのみいひ来れるを」、蕉風では「詩歌の情をうつし」それを俗体に言いなすのだ、とする。

確かに、『三冊子』には「作者感るや句と成る所は、即俳諧の誠也」(白双紙)、「物に入りてその微の頭れて、情感ずるや句と成る所也」

たとへばものあらはにいひ出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば物・我二つになりて、その情誠に不至」とある。俳諧文学の通

俗性維持のために俗言を用いることは、貞徳の『御傘』(序)^{注5}・重頼の

『毛吹草』(序)^{注6}、『三冊子』・許六の『篇突』^{注8}など俳諧史上に一貫して

見える主張である。^{注9}

『ひとり言』は、その冒頭に、

俳諧の道は、あさきに似て深く、やすきに似てつたはりがたし。初心の時は浅きよりふかきに入、至りて後は深きよりあさきに出とか聞し。むかしは人の心すなをにして、初中後を経しかど、今はその修行する人だにすくなく、心皆さきにはしりて、いつしか人もゆるさぬ上手にはなりけらし。これをおもふに、俳諧は只座当の化口にして、根もなきいひ捨草なりと、かろき事におもへるなるべし。是もまた和歌の一体とか聞時は、かりにも浅く敷おもふべき道にはあらぬを、ほいなき事にぞ侍る。

大かたの人は口にまかせていひつづくるを、この道の達者なりと心得て、更に我に益ある事をしらず。俳諧は只まことにもとづく中立なりと、心をよせて修行すべし。

とある。これは鬼貫五十八歳の到達点を示すものである。前述のごと

く鬼貫は八歳のころから発句をよみはじめ、十三歳にして松江維舟に従い、さらに談林の俳風に心酔して、その風を志向した。当時の俳諧師たちが一様に通った道ではあったが、鬼貫がその道程の中で、俳諧文学の本道を求め続けた結果であった。

鬼貫の「まこと」の説は、早く元禄三年(鬼貫三十歳)の『大借物狂』の跋文中にその萌芽を見ることが出来る。

和歌の道は我朝の法也。法は常也。その常をしらば俳諧をしるべし。俳諧の夢覚^メなばまた常をしらん。なれど、我いまだ此道の達人を見ず。世人皆風体にかゝはり、或は句を巧みにし、言葉をかざりて、前句のなじみをもわきまへず。徳あれば人夫を悪敷におかず、若我を以て徳を押^メ時は、其我にゆづりて、作る所の句の中に、巻頭あるの意味をしらず。唯俳諧の味を喰ひ、今日のたすかる事をえずして得る所、皆病のみなり。曰^ク人と我と常いふ所の言葉、十七・十四にきれば、ことごとく俳諧也。其世界をしらば、全体前句のなじみあるべし。発句も亦々目前の常を作らば、意味深うしてしかも句ひあらん。その大道にいたらずして、かたちを似せば、一句になどか色香を持たん。善悪を知て、姿風体のよき所にとゞまるも、是病なれば、只不可^{注10}のふたつをもわするべし。わするゝといふも亦おなじ病なり。

「和歌の道は我朝の法也。法は常也。その常をしらば俳諧をしるべし。」世人皆風体にかゝはり、或は句を巧みにし、言葉をかざりて、「発句も亦々目前の常を作らば、意味深うしてしかも句ひあらん。その大道に至らずして、かたちを似せば、一句になどか色香を持たん。」という考え方は、「ひとり言」の、

思ふにいにしへよりの俳諧はみな詞たくみにし、一句のすがたおほくはせちにして、或は色品をかざるのみにして心浅し。つら／＼よき歌といふをおもふに、詞に巧みもなく、姿に色品をかざらず、只さら／＼とよみながして、しかも其心深し。

四

に对照され、その前提たる「和歌の道は我朝の法也」は、芭蕉の「不易流行」の説にも通うものである。

又、「俳諧の夢覚、なばまた常をしらん。」は、「その頃当風と聞えし句」、「摺小木も紅葉しにけり唐からし」のごとく「たゞ俳諧は狂句作意をいふとのみ心得たるばかり」（『ひとり言』）の「心浅」き境地をさし、これに「一槩にかたよるべき道にもあらず」と疑義をいだき、「猶深き深もやあらんと、延宝九年の頃より骨髓にとをりて、物みな心にそむくことなく、やゝ五とせを経て、貞享二年の春、まことの外に俳諧なしとおもひうけ」るようになった（『ひとり言』）に对照される。

「和歌の道は我朝の法也。法は常也。その常をしらば俳諧をしるべし。俳諧の夢覚、なばまた常を知らん。」「是もまた和歌の一体とか聞時は、かりにも浅／＼敷おもふべき道にはあらぬを、」「つら／＼よき歌といふをおもふに、詞巧みもなく、姿に色・品をかざらず、只さら／＼とよみながして、しかも其心深し。」「すなわち、俳諧文学を伝統の和歌文学の一体として把握、去我・無技巧を貫くことによつて、「まこと」にせまらんとする時、その作物はおのずから幽玄の世界に達するという考えである。

さて、「俳諧小言」の第一則には、「中昔まではたゞ狂言のみいひ来れるを、ちかき昔、ばせを翁よりはじめて詩歌の情をうつし、風雅の心を俗体に去る事になりたり。」それは、「『詩経』『万葉』等の古体に似たるべし。」とあり、さらに、蕉翁の風雅は『詩経』『万葉』などはかなき草木魚鳥におほくのおもひをよせたるやうに、風雅の心物にうつりて、おのづからなし出せることぐさ、人の耳を驚し、かく百年の今にもめで興ずるは、ひとへに那なき風雅の心の根本に土かひ水そぐゆゑに、いひわせることわはぐさ、ひとつ／＼にめづらしくあたらしく自然の姿をなし侍るならし。」とある。

すなわち、俳諧文学は「詩歌の情をうつし、風雅の心を俗体に言うものであって、それは『詩経』や『万葉』の古体に似ている。それが「百年の今にもめで興ずる」ことの出来るのは「ひとへに邪なき風雅の心」を以てするゆゑにであるというのだ。ここにおける、「雅なき風雅の心」は、そのまま芭蕉の「風雅の誠」を継承するものであるが、鬼貫の「まこと」により深いかかわりを見ることも出来る。このことについては後で述べる。

「俳諧小言」の第二則に、

句をつくるに至りて、しひて雅を求べからず、つとめて俗を去にあり。

(中略) 雅なる趣めづらしき詞を求るゆゑに、その求る所につきてははや俗意は出くるなり云々。

とある。これは、『ひとり言』が、

むかしは人の心すなをにして、初中後を経しかど、今はその修行する人だにすくなく、心皆さきにはしりて、いつしか人もゆるさぬ上手にはなりけらし。これを思ふに、俳諧は只当座の化口にして、根もなきいひ捨草なりとかるき事におもへるなるべし。

一座におもしろき付句の一二句もつゞきたらん時、それよりも猶まさりたる句をせんと、大かたの人は一入ちからを入れて案じ侍れど、いかにもかるくやり句する人まれ也。只よき句をくと独りくが案じいらば、しかも能句の出る事かたくや侍らん。さらくとやりながしたる跡は、更に能句も出来ぬべし。

句を作るに、すがた・詞をのみ工みにすれば、まことすくなし。只心を深く入て、姿ことばにかはらぬこそこのましけれ。

いつはりを除きて、まことをのみいひのべんとちからを入れて案じ侍るは、いつはりいふにはまさりたれど、これも又まことを作りたる細工の句にて侍り。

などと言うのに対照される。

「俳諧小言」の第三則には、

句を見るに心得あり。その句の心雅なりや俗なりやと心をせめて、詞の工拙は第二等なるべし。たとへば、詞はめでたくとも俗意あらば取べからず。その心に雅趣あらば、つたなき詞卑きことばもあへて嫌ふべからず。

とある。「詞の工拙は第二等なるべし」「詞はめでたくとも俗意あらば取べからず」、「まことの外に俳諧なし」なのであって、鬼貫が言うように、「いにしへよりの俳諧」のごとくそれは、「みな詞たくみにして、或は色・品をかざるのみにて心浅」く、古来よき歌は「詞に巧みもなく、姿に色・品もかざらず、たゞさらくとよみながして、しかも其心深し」なのである。

このことは文章にあつても同断であつて、「俳諧小言」の第四則には、

文章は実を尊む。奇言怪語をつゞけぬるも、文章一篇の実なくば、木偶のめでたくそうぞきて立ちむがごとし。(中略) 古より俳諧文章の筆格なし。蕉翁に至りて始めてその趣をあらはす。その趣とは何ぞや。詩歌文章の実をうしなはずして、俚語鄙言をまじへたるなり。その交るにまた心得あり。かならず俗におち入む事をおそるべし。すべて文章のみにかぎらず、俳諧の工夫たゞ去俗の二字にあり。

とある。このことは、『非仙集』序にも、

思ふに、文よくかく人の筆にまかせたらましかば、いかにあやしくもたへにもなりなまし。しかれども、文章に実なくば、ながく翫ぶ人まれなるべし。わがこのめる俳諧のみちもこれにおなじく、いさゝか風雅の実をそこなはず、あだに一時のいつはりごとくなりて、後は手にだにとる人なくなりゆき侍らむか。

とある。「風雅の心を俗体に云ふ事」が俳諧の文学であり、そのため

にかならず俗におち入む事をおそるべし」という考え方をおろさかに出来ないと言うのである。『ひとり言』に、『古今集』仮名序をふまえて、

それ俳諧は和歌のはしなれば、心を種として万の葉となり、目に見えぬ鬼神をも哀とおもはせ、猛きものゝふをもなくさむる道とこそ聞しか。俳諧を修してまことの道を行侍らば、なまけしらぬ人すら情をしり、あるは不孝不忠の人も不の実をとをさくべし。

と述べてある。「俗におち入む事」を恐れて、人倫の修行に努むべきことは、

俳諧は只まことにもとづく中立なりと、心よせて修行すべし。たとへば、わかき人の親にいたくいさめられん時、腹だゝしきころの出る事あらば、親といふ前句に子として腹立る体を付句に取なおして見侍るべし。(中略)四海みな兄弟なりと心のあゆみをつけ、常のわざ俳諧になぞらへ、はいかいを又つねのむつまじ事に案じよらば、自然と句毎にのりなじみも出来ぬべし。

とあるように、それは、俳諧文学の理念としてだけでなく、文学を志す者の生活上の理念でもあって、それを基盤としてこそ「まことの俳諧」は成立すると言っているのである。したがって、「まことの俳諧」を成さんとすれば、まず自身のうちに「まこと」を確立することが必要となり、それなくして、「去俗」は成り立ちがたく、「詞に巧もなく、姿に色・品をかざらず、只さらく」とよみなが「すことも不可能とな

ると言うのである。

「ひとり言」に言う、

俳諧の修行もなくて、心のみ高く止りたる作者は、たとへばたかどのゝ上にのぼりて、四方山をながめつくしたる人の、心ゆう／＼と打晴たりといへるを聞て、我もともに風景を見てんとて、居ながら其所に至らん事をこのめるがごとし。ひとつ／＼階をのぼらずして、いかでか高き所に至るべき。此理りをよくわきまへ侍りて、未練の人はひたすら修行すべき事にぞ侍る。

と、又、

俳諧の修行といへるは、ひたすら句にまことの味ひを稽吉して、平生人に交るをも、すぐにそのまことを用ひて、いつはりなき事を、むねと心得たらんをこそいふべけれ。

我は俳諧を仕習ひてより、いくとせを重ねたりと指をかぞへて、そののみ修行なりとおもへる人は、心得違ひも侍らん。まことの道にころをよせずして、句のうへをのみいひもてあそびたる作者は、たとひいくとせをふるとも、身の益とはならずや侍らん。

と言う。成美は、蝶夢門の画人・麦宇の言、「さればこそ、胸中一味の俳諧をたくはへたれば、見るものきくものやがて心の友となりて、それをもてまたこのめる人にまじはれば、五歩に友あり十歩に朋あり。豈これをとぼしとせんや。また山水泉石の、日々の旅にかはり行けしき、すべて雲烟の眼に過るもの、みな吾画中の趣となれ、さらば、さらに古人の跡をからず。」を受けて、「げに此人の心たかさは、此こと葉ひと

つにもおしはかるべし。」と述べている。麦宇が言う「胸中一味の俳諧」、これが「まこと」の本態なのである。俳諧修行の果てに得た「胸中一味の俳諧」、そのみが俳諧文学の源泉であり、作意・技巧は無用と云うのである。

もう一つ、成美は『金翠句帳』^{注13}の序で、

亡年の友硯亭、つねに來りて閑をたすく。かかつていふ。「風情をもとむるに、胸中せまくして一事のたくはへたるなく、句をつくるにたよりなし」と。われいはく、「しからず。俳諧は無念想をよしとす。腹中万巻の書ありとも、口にいふ処さらにそのちからをからず。おのづから一家の工夫ありて、無念より一有を生じ、一有わかれて万象となる。見る処おもふところ、その物たゞちに心の師となりてこと葉に出情をうつす」云々。

とも言うのである。「作意」を離れ、「胸中一味の俳諧」によって万物に対すとき「一有を生じ、一有わかれて万象となる。見る処おもふところ、その物たゞちに心の師となりてこと葉に出情うつす」ことができるというのである。

五

「俳諧小言」第五則では、

手尔乎波はすべて自得すべし。ぞ・けるやらむ、とは誰もおぼえたる事にて、それまでの物ならばさらに工夫はいるべからず。鬼神を泣しむるもたゞ

てにをはの事なれば、おろそかにいひまぎらはしてなにの感か侍らむ。おほよそこの国は手尔波をもて埒するならひなれば、伝受口決によらずして手尔波はあきらかならむ物なり。そのしるしは常談平語といへども、ひとつのてにはたがひぬればその趣のきこえざるにてもしるべし。さるが中に、詞は世をもて変ずるものなれば、手尔波といへども、詞にしたがひて今古いさゝかのがたがひめもあるべし。『万葉』『古今』の歌の中、いまの世にもちひざるてには粗見え侍り。しひてむつかしくはむ人にむかひては、俳諧一家の手尔波といはむもあしからじ。

と云う。言葉の約束が大事なことは、「常談平語といへども、ひとつのてにはたがひぬればその趣のきこえざるにてもしるべし。」と云う通りであり、これを前提して、そのうえさらに、「手尔波といへども、詞にしたがひて今古いさゝかのがたがひめもあるべし。」として、言葉の不易流行を説き、「しひてむつかしくはむ人にむかひては、俳諧一家の手尔波といはむもあしからじ。」と表現における独自性を主張している。このことは、「附句」について述べた第六則でも、「附句は、前よりの寄やう、句毎の転変、かねてかくとは定めがたけれど、一つの理をだに去捨侍らば無礙自在なるべし。」として次のように言う。

そのゆゑは、風雅の心はもとより理のほかなる物なれば也。理の外なるわざを理をもておさんとするがゆゑに、水の上に胡蘆子をまらばすがごとく、つひに手にとるべからざるがごとし。理の外といふにもまた所謂あり。一向に理を放下せよとはあらず、ただ理におち入理に縛せられぬやうにとおもふべきなり。

と云い、「去嫌」について述べた第七則でも、

第一は句の好悪にして、さし合は第二の論なるべし。古人変化のためにまうけたる法則なるを、其書彼書の空論をもて実地の附句を撃縛し、かへりて変化の趣をやぶる。(中略) 本より諸書のさしあひ詞の数々、いかなる強記の人なりとも一々記憶せむことかたかるべし。詞は無尽の物なれば、諸書の法則もわづかにその大綱をあげたるものならず。さりとてみだりに古法を戻すべきにあらず。

と言っている。いずれも「胸中一味の俳諧」そのみが詩の源泉であるという考え方にもとづくものとみてよからう。したがって第九則で言う、世人の褒貶さらしたのむべからず。今の世の人のきよをよるこびて、わが心におもはぬ詞どもをつゞけ侍るは、これ世にへつらふ鳴呼の者といふべし。」も、こうした論の延長線上にあるとみななければならない。

再三言うように、鬼貫の「まこと」の説のよって立つところは、日常生活の中で遵守せられるべき人倫の確立にあり、成美のそれもまた、

かくいはゞ自讃の心のみすゝみて稽古の害ならんとおもふ人あるべけれど、心はかくのごとく高き所にをらざれば、その風格次第に卑俗におち入るべきなり。たゞし、此ころをもて人をおとしめいはむとはあらず。

と言うように、作者そのものの仁徳を基盤とする。『ひとり言』には、

未熟にしてわれこそ熟したれとおもへる人は、おろかにぞ侍る。修したる

覚もなくて、上手になるべき道理はあらじと、我とわが心をさがしてあやまりをしろべし。修行なき人の器用一ぺんにて、及ぶべきことにもあらず。又、智恵才覚をもて至るべき道にもあらず。

俳諧の修行といへるは、ひたすら句にまことの味を稽古して、平生人に交るをも、すぐにそのまことを用ひて、いつはりなき事を、むねと心得たらんをこそいふべけれ。

とある。「俳諧小言」には、

世上に俳諧を唱ふる者、しりがほにしておほむね俳諧の趣をしらず。白眼放言してみだりに他の人をそしる。その人いかばかりの上手なりやおもふに、またおなじ俗士なるのみ。

とあって、作者のよって立つべきところ、すなはち「胸中一味の俳諧」その確立、その度合によつて句作の方法作品の品性がきまるものと言うのである。

六

『四山叢』には、

かのおにつらが『禁足旅記』は、くはだてゝおもふ処に至る。(『しみのすもり』序)

鬼貫が『禁足記行』の例をおもひ、晋子が新山家のあそびに似たり。(『一

日湯治記)

彼鬼貫が『禁足紀行』のたぐひにもよそへつべしと、そのころぎしよきを大によるこび、(『発句帖』序)

と、鬼貫が「まこと」の説にもとづく孝心の結昌であるとされる、父の老衰を案じて計画中の旅を断念し、心を遊ばせることによって成した「禁足之旅記」(『犬居士』所収)をあげている。

又、成美は蔵前の富裕な札差で、天明二年弟に家督を譲って、隅田川の対岸多田森に隠栖、翌年たまたま弟の急死により再度家業にもどり、五十一歳ころ家督をその息に譲るまで半雅半俗の生活を送ったが、みずから「俳諧独行の旅人随齋夏成美」(『しみのすもり』序)と称したように、特定の師を定めず、門戸を張らずに自由な俳境に遊んだ人であった。

丸山一彦氏によれば、鬼貫は「^{注4}勘者」とよばれた財政の専門家で、伊丹の酒造業資本から大名貸を受けた諸藩が財政破綻に陥ったとき、財政再建管理者として当該藩に赴き、その事に当たったものという。鬼貫は談林俳諧を死守せんとする大阪・伊丹にあって、独自の俳論をうち立てていった人であり、かれはいわゆる職業俳人ではなく、その意味で俳壇の時流とは別に自由な立場でその論・作風を展開することも出来た。

成美は鬼貫の著作を通してその論に接し、又、社会的・俳壇的立場の近似するをもって、その生き方の範とすべく考えることもあったの

ではないか。成美の俳論を芭蕉崇拜・芭蕉志向という側面からだけ考えることにいささかの躊躇を覚えるのである。

注

- 1 『ひとり言』の本文は、日本名著全集本(俳文俳句集)による。
- 2 『ひとり言』上巻。
- 3 『四山藁』の本文は、古典俳文学大系本による。
- 4 たとえば、成美の俳諧観は『四山藁』文政三年に載る「俳諧小言」に見られる。芭蕉に傾倒し、「邪なき風雅の心の根本に上かひ水そぐゆえに、いひ出せることはぐさ、ひとつくにめづらしくあたらしく自然の姿をなし得るならし」「さらに末師を捨てたぐちに蕉翁の心を削り、形を疲て求たる所を求べし」と言う。句作に当っては、「しひて雅を求べからず。つとめて俗を去にあり。俗なる心こと葉だに去捨侍らば、雅はおのづからめだかるべし」と述べ、句の可否の判断もその心の雅俗を見ればよいと言っている。(大磯義雄「化政俳諧史」・明治書院版俳句講座第一巻所収)
- 5 抑はじめは俳諧と連歌のわいだめなし、其中よりやさしき詞をつづけて連歌といひ、俗言を嫌はず作する句を俳諧といふなり。
- 6 凡、俳諧の徳を思ふに、詩歌連歌の詩は申すに及ず、あらゆる俗語に至る迄、大かた其嫌なくひろく言出けるにや。なべての人耳にうとからずして和歌の友となる事をのづからなりけるが故に、酔のたはぶれ、道行の云ひ種にも口すさびて、其興をもよほすと見へたり。
- 7 俳諧の益は俗語を正すなり。
- 8 俳諧は俗語平語をのべ侍れば、誰もよくいひ習ひたるに似侍れ共、しる人の耳にはいと浅間しき事のみ多し。第一てにはの事をとらぬ故に一句の首尾調はぬ句のみ也。
- 9 談林の「狂言」については、その指導者の中にも「俳諧常の詞の俗をもちゆれ共、俗中の俗はこのむべからず。俗にして俗ならざる詞よく工夫すべし」(中西惟中『近來俳諧風体抄』)という意見もあって、自由奔放な表現を旨とする談林の俳諧師たちの中にもそれに疑義を唱える者もあったことが知られる。

- 10 「鬼貫全集」(春陽堂)本による。
- 11 『四山藁』(第一)所収。天明七年成。
- 12 『麦字句帖』序。『四山藁』(第二)所収。
- 13 『四山藁』(第二)所収。
- 14 『日本文学全史』④一四五P、林基「藤原宗邇伝」小考「地域研究い
たみ」五(昭51)による。